

特集●たばこ研究

たばこ対策研究の現状と今後の研究課題	鳥取大学医学部社会医学講座環境予防医学分野	尾崎 米厚
わが国のたばこ対策の検証と期待される政策研究	大阪府立成人病センターがん相談支援センター	大島 明
地域における喫煙対策の実践と研究	神奈川県保健福祉部医療課	原田 久
受動喫煙対策に関する研究成果と今後の課題	産業医科大学産業生態科学研究所	大和 浩
禁煙治療・禁煙支援に関する研究成果と今後の課題	大阪府立健康科学センター健康生活推進部	中村 正和
歯科・口腔領域の研究成果と対策および無煙たばこ対策	福岡歯科大学	埴岡 隆
価格誘導政策のターゲットは誰か—価格弾力性をめぐる研究成果と今後の政策展望	中央大学大学院公共政策研究科	細野 助博

たばこ対策の推進に向けた保健医療専門学会の取り組み

JA 岐阜厚生連中濃厚生病院内科総合内科 飯田 真美・藤原 久義

●視点

わが国の予防医学の戦略をどう構築すべきか? —岩手医科大学医学部衛生学公衆衛生学 坂田 清美

●特別記事

近隣の社会環境が及ぼす住民への健康影響 —ハーバード大学社会疫学教授 イチロー・カワチ

あ と が き

今年も早いもので、もう6月です。読者の皆様は、6月といえば何を連想されるでしょうか。

日本人の間でもよく知られている「ジュンブライド(June bride)」という言葉は、直訳すると「6月の花嫁」ですが、その由来には諸説あるようです。

なかでも、ローマ神話のユピテル(ジュピター)の妻ユノ(ジュノー)が結婚をつかさどる女神であることから、6月に結婚する花嫁は幸せになるという説は有名です。そのほか、ヨーロッパの6月は1年中最も雨が少なく気候に恵まれ、復活祭の時期でもあることから、ヨーロッパ全体が祝福ムードに包まれるため、6月の花嫁は幸せになれるという説もあるそうです。

日本の6月といえば、「梅雨」という言葉を連想される

方も多いと思います。ヨーロッパとは反対に、日本の6月は気候的には1年で最もうっとおしい時期といえるかもしれません。

雨で外出したくない6月の休日こそ、読書日和です。今月号の特集は「若者を性感染症から守る」。若者の間で急速に広がっているといわれる性感染症ですが、これから花嫁や花婿になる方々が健康で幸せな結婚生活を送れるよう、早い時期からの予防教育が求められます。

白井先生の「地域でのネットワークづくり」や渡會先生の「時代・地域に合った取り組み」が全国に広がり、「生きるための心」を学んだ男女が増えることを願っています。

(品川靖子)

公衆衛生(第72巻 第6号) 2008年6月15日発行(毎月1回15日発行)

定価 2,415 円(本体 2,300 円+税 5%)(2008 年々ぎめ予約購読料 28,200 円 ※配送料弊社負担)

発行:株式会社 医学書院 代表者 金原 優

☎ 113-8719 東京都文京区本郷 1-28-23

本誌編集室直通 TEL (03)3817-5718 FAX (03)3815-7802

販売部直通 TEL (03)3817-5659・5660 FAX (03)3815-7804

E-mail: koshu@igaku-shoin.co.jp 振替口座 00170-9-96693 番

印刷所:三美印刷(株)TEL (03)3803-3131

広告申込所:(株)東広社 TEL (03)3409-8803/デザイン:デザイン・プレイス

・Published by IGAKU-SHOIN Ltd., 1-28-23 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo

© 2008, Printed in Japan.

・本誌に掲載された著作物の複写・複製・転載・翻訳・データベースへの取り込みおよび送信(送信可能化権を含む)に関する許諾権は医学書院が保有しています。

・JCLIS《©日本著作出版権管理システム委託出版物)

本誌の無断複写は著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつと事前に©日本著作出版権管理システム(03-3817-5670)の許諾を得てください。

・医学書院ホームページ <http://www.igaku-shoin.co.jp>

・公衆衛生 URL <http://www.igaku-shoin.co.jp/mag/koshu/>

編集顧問

多田 羅浩三 大阪大学名誉教授・放送大学教授

林 謙治 国立保健医療科学院

編集委員 (50 音順)

阿彦 忠之 山形県健康福祉部・衛生研究所

品川 靖子 東京都文京区文京保健所

高島 敏雄 大阪大学大学院医学系研究科

西田 茂樹 福島県衛生研究所

編集室通信

宮城県名取市の岡部医院理事長の岡部医師は、哲学・社会学・歴史学などの専門家とともに「タナトロジー研究会」を結成し、日本人の死の文化についてご研究なさっています。主に東北の農村での在宅ターミナルの現場で、家で死にゆく人のありようを見、語りを聞いていらっしゃるとのこと。そこでは病院で医療漬けになって死ぬのではない、家の中での普段の生活の延長線上に、穏やかに死があります。家での最期は、死にゆく人も看取る人も、ゆっくりと死の恐怖から解かれ、静かに、心の奥深くで、人が死ぬということを受け入れていくようです。都市型の病院死ではない、農村での在宅死のありようこそ、「日本人の死の基本形」ではないかとの言葉が印象的でした。「特別記事」をご覧ください。(野中)

(担当/野中・今田)